「花の沈黙」を思索する人

山本十四尾詩集『水の充実』に寄せて

1　「冬の川」の我と汝

山本十四尾さんが今までの詩集で取り上げた最も好きな花をあげてみると、しゃがの花が浮かんでくる。林や庭園などにひっそりと咲く淡白紫色の花は、清楚でとても上品だ。心ひそかに山本さんはしゃがの花のような詩人だ、と私は思っている。山本さんの詩はリアリズムの極致とも言える観察眼に基づいているのだが、人間存在の美醜を超えて崇高さを感じさせる精神性をいつかきちんと論じてみたいと思っていた。その山本さんが新詩集『水の充実』を刊行した。

山本さんとの関わりは、一九九〇年一月に私が「詩学」の詩誌月評で一篇の詩「汝（うぬ）」を論じたことから始まった。その詩は「花葬などは贅沢だ」という一行から始まり、汝を憎むことから鳥葬や土葬でも飽き足らない、虫に身体を肉食させる怨葬を幻視した短い作品だった。その詩を一読した時の驚きは今もはっきりと覚えている。我と汝、自己と他者との関わりを徹底して問うている試みが日本人離れしていると、私には直観的に思われたのだ。たった一篇の詩を読んだだけだが、この執拗に人間の内面の美醜を掘り起こすことができる詩人の出現に、私は強い関心を抱き、高く評価するようになった。他者との関わりで引き起こされる情念を直視する山本さんの試みは、萩原朔太郎ら優れた詩人が自己の内面に問うてきた、詩の最も重要で本来的な系譜であると思われた。山本さんは人間の最も醜い情念を知るからこそ、もっとも貴い情念というか、情念を超えた精神の価値を我々に差し出すことができるのだ。山本さんの情念の追求の仕方は、情念の世界に閉じてゆくのではなく、世界の中で情念をあぶり出し抉り出すような試みのように私には思われる。この人間の情念の本質を遍歴する山本十四尾という詩人がどのように誕生したか、新詩集に触れる前に、これまでの詩集を振り返りながら探ってみたいと思う。

山本さんはこれまでに十一冊の詩集を出している。その出発点であった第一詩集『声』の二番目の作品「冬の川」を引用してみる。

瀬所で背のびをしても
砂の上に風の足跡があるだけだ
冬の川の両胸をおおっているのは
北国で死んで流れついた木の葉だが。

おまえ
目にさかせた千振の花を
ひきぬいてしまえ

たとへ苦しんで　自分を無にして
明治の千振の花をさかせたとしても
ははたちとおまえは永遠の黒色のパラレル
すべてがはっきりとしたことだ。

おまえ
反芻し咀嚼するのは
愛。
白くない指　細くない指
しかし摑んだものはもらさない手で
ごつごつした沙魚のような幸福を
料理し味わうことだ
もうまわりに気をつかうこともない。

おまえ
下唇の中央の一筋の線は
いつかぼくがぬらしたままおまえが月にむけたとき
日本刀のように冷酷な北風が傷つけた嫉妬
ジエラシーは祝福だ。

（第一詩集『声』の「冬の川」より、一九六一年刊行）

今から四十五年前のこの詩を読んでみて、二十五歳の山本さんがどんな詩的精神でこの詩を書いたのか、思い描いてみる。「冬の川」とは故郷の川であると同時に、愛する女性とこれから挑んでいく人生の困難な道のりのように想像されてくる。その女性にむけて「おまえ」と呼びかける詩は、とても清々しい愛に満ちていて、親たちから祝福されない結婚へと向かう決意が溢れ出ている。千振という秋の野草は白い花びらに紫の線が掃かれている小さく可憐な花だ。その花をははたちの世代の象徴として「ひきぬいてしまえ」と言っているのは、強い意志力を感じさせてくれる。そして「反芻し咀嚼するのは／愛。」と決意する。「ははたちとおまえは永遠の黒色のパラレル」と言いきる洞察力は、違う世代の宿命的な反目を言い当てている。ははたちの世代の宿命的な生き方と自分たちの生き方の差異を山本さんは決して曖昧にしなかったのだろう。「ジエラシーは祝福だ」という言葉は、誰も自分の生き方を生きるしかないというははたちの世代との格闘の果ての深い認識だと思われる。

山本さんの詩を読み続けていて、ふと湧き上がってきた思いがあった。詩とは、詩人という単独者の内面の極限から発せられ、他者存在と関わる人生の意味を考えた究極の問いに答えようとする行為ではないか。山本さんの半世紀にわたる詩作活動は、そんなシンプルな問いを発していて、その問いを深め続けている。その意味で山本さんは、唯一のテーマを繰り返し反復する本来的な詩人としての歩みを第一詩集から続けていると、私には感じられたのだ。

第二詩集『母のことなど十七の小品』は、版形がB5サイズの変形という普通の詩集より一回り大きい、山本さんのその後の詩集に共通するサイズになっている。大きな文字で行間をたっぷり取り、一行一行を刻み込むようにして、読みやすくするという美学の原点になった詩集だろう。三十歳で出したこの詩集には、冒頭に次の「母に」という献詞が書かれている。

母　に

すすきは誰れのためにも白くなるのではない
すすきは自分のために白くなるのである
そう気づくのに
ぼくはずいぶん時間をかけてきてしまった

（『母のことなど十七の小品』の「献詞」一九六五年刊）

この「母に」に込められた想いはとても深いと思う。この世に生まれたときに初めて出会うのは母である。成長する過程で最も濃密な時間を共有するのは母だろう。愛情深い母は、子のためにという自己犠牲の精神によって子との関係を絶対化してしまう傾向がある。その絶対化された呪縛を山本さんは解きほぐそうとする。母は「自分のために白くなるのである」という視点によって、母一人の固有の人生を見詰めようとしている。母の生き方を、母の生きてきた時間を「すすき」に仮託しながら暗示させている。その意味では、この献詞によって山本さんは母から本当の自立を為し得たのかも知れない。そのことを母へ宣言したのがこの詩集の意味だったのだろう。

何回めかの河のふち
あたりの模様は一変している

わたしは手をひろげにここにきた
手がおもくて　手の内の余分を捨てたくて

捨物があわただしく流れていくかたわらで
ぴちゃぴちゃ　水の摩擦にきれいになって
もう軽くなった手苗がゆっくり遠のいていく

幼年時代の柔さに戻って
白さを増して

手は一指一指ひらかれ　しかしこんどは
喪失させられるために　ひらかれて

（「母」全行）

この詩集の最後に置かれた詩「母」には多くの説明は要らないだろう。「手の内の余分を捨てたくて」というように、母との別れは自然にこのようにされるべきだと記されているだけだ。そこに無駄な執着やエネルギーが働くから悲劇が始まると山本さんは無言で語っているように思われる。「喪失させられるために　ひらかれて」とは、親子の時間の終焉をきちんと目撃することが、新たな親子の自立した関係の時間を生み出す契機になることを告げているように思う。「白さを増して」とは、母が子への執着から解き放たれて自由を増していって欲しい、という願いを込めていたのではないだろうか。

2　「井守」の美学

第四詩集『断続』の目次を見ると、三十七篇の詩を六つの章に分けている。「首吊り、花、村、川、色頃、鵙」の六つのテーマはどれもが山本さんの生存と世界との関係が切り結ぶ切実なテーマであることが分かる。

こころを捨てたからといって
生きていけないことではないのに
それが非常にむずかしいと
わたしたちはきめつけている
むずかしいから　こころを捨てるには
あのように
枝にぶらさがる人がでてくるのであろうか
見事に変色して
すでに縄の色彩に同化している
たばこの葉のように山背風にゆれている

（『断続』の「首吊り1」全行、一九七一年刊）

この冒頭にある「首吊り1」を読めば、誰もが衝撃を受けるだろう。ここに書かれたことが真実であり、リアリズムの極致であることを誰もが認めざるをえない。心優しくあまりに心に拘泥しすぎた結果、「こころを捨てる」ことができない人が自殺をするという苛酷な現実を直視している。心を捨てても人は生き続けなくてはならない時がある、という思いを山本さんは指摘しているだけだろう。あからさまに最も詩に困難なテーマに挑戦していく精神力の強靭さに驚かされるのだ。それは世界の狂気を直視しながらも、生を肯定していく人間の深層の智恵を、山本さんは信じているからだろう。人間は生きるためには、自らを生の外に追いつめる「こころを捨てる」瞬間があってもいいのだ、というリアリズムの知恵を告げている。けれども人の世は「枝にぶらさがる人」を作りだしてしまう。その苛酷な現実を「すでに縄の色彩に同化している／たばこの葉のように山背風にゆれている」という

世界の冷酷な有り様を踏まえて、詩は書かれなくてはならない、という山本さんの詩論のような詩であった。梶井基次郎は桜の咲く木の根元に死体を幻視したが、山本さんは緑葉の樹木の「枝にぶらさがる人」を幻視していたのだ。生きるべきか死ぬべきか、その人が苦悩するのを引き受けるのが、詩のテーマであり、生きることを促すのが、詩の最大のテーマなのだと山本さんは告げていると感じられる。

第五詩集『井守』では故郷の沼に生息する井守の存在が中心テーマとなっている。その醜悪な姿に我々の心の奥底に潜んでいる、生の根源を垣間見ようとしている。井守を焼き、酒の肴として食べる古老の詩などは、「人の怨念」を腹に飲み込んでしまう智恵のようなカタルシスさえ感じさせてくれる。詩集の中でわたしが最も評価する作品は次に挙げる「女」という詩だ。

つめの美しい女でなければならない　それも御弾がのらないほどの三日月の曲を持った爪でなければならない　そしてやせているよりは　こぶとりであってほしい　色は南魚沼町の雪の白さであってほしい

左のふとももにつけねにむかって　井守の刺青をしてみたい　目のできるだけ細い井守が鋭敏な舌を出している姿態でなくてはならない　赤と黒の模様を色鮮かに染めなさしめねばならない　右のふとももにつけねから香りを出している紫式部の花と実の刺青をしてみたい　あわい紫色の花が散らばっている風情でなければならない　碧紫色の小さな実が涙のようにおちこぼれている絵でなければならない

紫式部の花を敷きつめ　紫式部の実の首輪をして井守が息している構図を完成することのできる　足のしなやかな女でなければならない

（『井守』の「女」全行、一九七七年刊）

この詩には、誰よりも確信を持って山本さんの美学に引き込んでしまう妖しい誘惑がある。美しい日本画の世界の製作過程を覗き見ているような気がしてくる。最も醜悪な生きものを昇華した井守の似姿と紫式部の実の構図を、理想的な美女のふとももに刺青するという幻想が、目の前で行われているかのように描かれている。このような三要素で構成された映像感覚は、エログロになってしまうはずだが、山本さんの場合は彫刻家のようなストイックさを感じさせてくれるのが特徴だろう。その意味では山本さんは人生派的な詩人というだけでなく、鋭敏な映像感覚美の詩人と言える。けれども故郷の井守への偏愛には、山本さんの魂の逆説的な論理があり、その思考回路が確信を持ってその感覚映像美を我々に差し出す所以なのだろう。自分を産み育て生かしてきた事物からの想像的論理と言えるかも知れない。それは異質なものを結びつけてしまうには、己の魂の奥底を必ず経過させなければならない、という境界を踏み越えていく論理なのだと私には感じられるのだ。

3　「山本十四尾」の誕生

第一詩集から第五詩集まで山本さんは「山本利男詩集」と本名で記していた。第六詩集の「花栞」からは山本十四尾とペンネームで記されてある。山本さんの中で人生派的なところをさらに研ぎ澄まし、飛躍していく感覚映像美を目差す主体として、その名を命名されたのだろう。当て字の「十四尾」だが、「井守」への偏愛が十四匹の「井守」の「尾」を選ばせたのではないかとも推測されてくる。『井守』を徹底させた詩集を経過したからこそ、「山本十四尾」は誕生したのだと言えるだろう。

Ⅰ

かつてしゃがの花について詩を書いたことがあった　それに音符をつけてくれた先生が退官する日　学生と教職員が全員で合唱して送別してくれたという　しゃがの花に似た清楚な旋律は　校庭に集ってきた母親たちに感動を与えて
夕闇のなかに消えていった

Ⅱ

いまわたしは益子の里　西明寺に佇んでいる　訪ねる人もいなく　風の音と清水の流れる音と四方竹の葉のすれる音のなかで　しゃがの花をながめている　しゃがの花の群生に身をおいている　深閑とした霧雨が花びらをぬらし　白地をさらに白くし　うす紫の色あいをあざやかにしている
その妖艶さは美しいおんなの色香をなつかしく思いださせて　咲いている

（『花栞』の「しゃがの花」全行、一九八三年）

冒頭でも触れたが山本さんにとってこのしゃがの花は特別な存在である。自分を勇気づけてくれる存在としてたえず反復されている。私は一人一人の心の奥底には、かつてあらゆる先入観を持たずに童心で眺めた美しい花が、眠っていると思う。その関わりの時間こそが、その人にとってのかけがえのない価値であり、その人の生きた軌跡であると考えている。山本さんの誠実さはそれに正直であり、だからこそこれほど平明だが奥深い詩を書くことができるのだ。その奥深さとは、この詩にでてくる学生と教職員、母親たちといった他者たちが、一篇の詩・曲によって感動を共有する場所を描ききり、そしてさらにしゃがの花のような存在である「美しいおんな」へとまた戻って来ることだ。これは原因を結果で指し

示したり、結果を原因で指し示すといった、提喩の技法である含有関係を絶妙に実現させているように私には考えられるのだ。その意味で山本さんは高度なレトリックを意識させないが、詩の全体像や認識方法に分け入ると高度なテクニシャンであることがわかる。優れた詩には高度な認識方法というか、詩的な論理が隠されていて、それがテーマとの結びつきによって体現されていると私は考えており、この「しゃがの花」もまたその良き例だと思われる。

第八詩集『葬花』には五十二篇の詩が五章に分かれて収録されている。「さつきの花、沈丁花の花、芝桜の花、葬花、鯖雲」の五章には、今までの詩集にでてきた花に関わる詩も再録されていて、花の詩人である山本さんの四十代を終える集大成の詩集だった。その中の詩集題の詩「葬花」を引用してみる。

ひとは花を埋める　四季おりおりにでなく　人生のひとつの区切りとしたいと思う出来事に遭遇したとき　内部の土壌に花を埋める　そのときのこころを包んで

それらは時季を経て栞となる　ひとは葬花した花と同じ花に　ふと出会ったとき　脈拍に花の遺影を甦らせる　そして栞をとりだし　文庫本にさしはさむのだ

まるで他人の小説を読むような所作で　ひとは冷静に栞のなかの出来事を復元する　その栞がひとつであり　数多くもっていたりして人生がつづいている

（『葬花』の「葬花」全行、一九八五年刊）

ひとは唯一の花を持ち得る存在だが、出会いによって多くの花を持ち得る存在でもある。それらの数多くの花との出会いや、その花の思い出をどのように反復しているかが大切なのだと告げていると思われる。花を栞として残し、自分の物語の時間という頁に花栞として挟み込んでいく。この詩の味わい深さは栞ひとつで人生の折々のすべてを見通すようなゆったりとした視線が注がれていることなのだ。花を見詰めていくときの静かな沈黙の瞬間に人は、自己の生きてきた軌跡のなかで支えてくれた存在をどれだけ想起できるのか、それがとても重要なのだと告げている。今自分がここにいるのは、その花のような他者の存在がいたからこそであり、それを想起しながら共に生きることを願っている詩人の澄んだ心が伝わってくる詩なのだ。

4　「火、土、空、水」の想像力

山本さんは、第九詩集『風呂敷』で母の亡くなるまでのことを連作で書いた。父の裏切りに母が父を刺殺しようとする場面など、これほど母の存在を哀切をもって書かれた詩集を私は知らない。

第十七回現代詩人賞を受賞した第十詩集『雷道』では故郷の古老や風土、そして死を前にした父を含めた家族のことを書き切った。その最終章「垣根」の連作では、世界への通路のような今までにない多彩なテーマが書かれ始めた。

第十一詩集『舞雪』では、倒産の苦悩と家族や支援者への感謝、若い頃に流産させてしまった水子への巡礼など痛みと祈りに満ちた詩集であった。山本さんはこの三冊の詩集ですべてを書き切ったと思ったのではないか。けれどもそうはならなかった。これほど家族や故郷を突き詰めて問うてきた詩人の前には、世界という異郷から思いがけない問いかけが競り上がってきて、新たな詩のテーマが押しよせてきたのだ。それは会社破産に遭遇し、その極限の体験をくぐり抜けた果てに見えてきたことであったかも知れない。その中でも詩誌を新たに出し、また詩の勉強会を開いていくという詩誌運動を展開していく。山本さんは今も詩誌運動家としての優れた指導者として多くの若い詩人を励まし続けている。その運動の中から今回の第十二詩集『水の充実』は誕生したと言っても過言ではないだろう。日本の詩人は晩年になると衰えてしまうケースが多い。本来的には経験と思索が深まり、優れた詩が書かれるはずだ。例えば嵯峨信之、寺門仁、鳴海英吉などは亡くなる近くまで衰えることはなかった。山本さんもそれらの詩人と共通するエネルギーを持った詩人だろうと思われる。

『水の充実』は四章に分かれた「鳥族の交信、白いもの、箸、水の充実」の四十二篇からなっている。第一章「鳥族の交信」の冒頭に置かれた「蝶」という詩はアサギマダラという蝶に山本さんが遠い滋賀県まで会いに行く話だ。アサギマダラは台湾から一七九〇キロを八十余日かけ、飛来して来るという。山本さんは「そうまでして飛来してきたその意図　その思想」を確かめに向かうのだ。次の詩「鴉」では犬を連れて散歩をしているのだが、鉄砲がうたれ、今日は鴉駆除の日だとわかる。その時に山本さんは鴉の群が戦時中に見たB29とだぶってくる。そして玉蜀黍畑で見せしめに鴉の死骸を竹棒で吊しているのを見て、捕虜兵士を吊した姿ともたぶらせてしまう。この二篇によって山本さんは故郷の危機や世界の危機を暗示させているだけでなく、この詩集全体が世界の危機に想像力で立ち向かうことを宣言しているのだ。

それにしても「鴉」の後に配置された「袋耳　籠耳、鳥族の交信、鳥群、飛翔、群飛、俯瞰、天の深層、ゆうぐれ」の八篇は、いままでの山本さんからは想像できない驚くべき詩群である。山本さんは故郷の「土」に根付き、家族への愛憎というか、人の情念の「火」を見詰めていた詩人であった。けれどこの八篇では宮沢賢治のように「地」と「空」が深くつながっているという昇行のイメージを想像力で示し得てい

る。また「火」と「水」が引き合い、どこかで循環していることをスケールの大きい構想力で包み込んでいる。物質の四元素である「火、土、空、水」がこの詩集の中で引き合い反発し合い、渦巻き、循環し始めたのだ。

長は仲間たちにただちに飛揚し並列するよう交信した　他族の鳥群からの情報――例えば氷山　氷床　永久凍土などの溶解が急速にすすみ　海水面の水位が上昇し　一方では大きな旱魃があちこちに肝斑のように地表にあらわれ砂漠化し河川　湖の水は底をついたまま　また熱帯雨林の伐採で雨水の濾過機能　地球の自浄能力の低下で溜池が群発し　そこに蚊が群生　新しい脳炎を起こす風土病の因となっている　等々　今の地球の異常性――を伝達した

（「飛翔」より）

アサギマダラのように異国からの蝶や地球の隅々から渡ってくる鳥族たちは、人類が死滅に向かって、おかしつつある破壊現場の交信をしながら、身を寄せ合って飛びつづけている。長は脱落するものがこれ以上増えないように心配りしながら進んでいく。その仲間を守るために他族からも交信を受け、最良の場所を目差し飛んでいくのだろう。他国の軍事施設を冷徹に監視するという人工衛星に、もしあらゆる生命の幸せを祈るという心があったならと、山本さんは考えたのかも知れない。そのために必要な情報を鳥族たちから今こそ受け取るべきだと言っているように思われる。鳥インフルエンザなどにかかり目の前を落下していった他族の数千の群について、その異常な結果の原因を突き止めて、何が問題かを明らかにすべきだという。そこで明らかにされている「熱帯雨林の伐採で雨水の濾過機能　地球の自浄能力の低下で溜池が群発し　そこに蚊が群生　新しい脳炎を起こす風土病の因となっている」ことの意味を真剣に問うている。なぜ熱帯雨林は伐採されなくてはならなかったか。鳥族の長から伝達された「今の地球の異常性」は、人類への命を賭けた最後の警告だろう。そんな思いを込めてこの連作を山本さんは書き上げたに違いない。

大国のエゴとそれを容認する国々の盲従から発生する地球温暖化で　地球は弛緩しつづけて自浄能力を失いかけていることを長は実見した　それから立ち寄るところの島々の見直しとその結論を急ぎ仲間に提示しなければ　自分たちの種族の絶滅に連動する　時間がないと長は急降下し　飛翔集団の先頭に戻った　そして生きのびるための戦略を沈思するために水平飛翔へと移って行った

（「天の深層」より）

今こそ人間は追いつめられた鳥族への想像力を持たなければ、次は人類が今の鳥族の立場になりうることは時間の問題だと告げている。そのことを山本さんは「生きのびるための戦略」であり、天から降ってくる知恵であり、「天の深層」を深く考えることだと語っているように思う。その意味でこの「袋耳　籠耳」以降の八篇は現代の文明批判を読む者の内面に切実に訴えかけてくる。その問いかけられ方は、自分が地球破壊者の人類の一人として胸に突き刺さってくる。鳥族の長の生死をかけた飛翔が、いつのまにか今の我々が地球上で置かれた個々の立場であるかのように思われてくる。そんな人類の置かれている危機を感じさせてくれる連作だと私は考える。山本さんはあらゆる苦難を経験して、ついに昇行のイメージである「天の深層」に到達した。けれども己だけが自由に振る舞うのではなく、その自由であるべき天空で繰り広げられている、おびただしい人工衛星や飛行物体、悪い水におかされた鳥族たち、そんな飛ぶものの気持ちに成り代わっていった。その自由な視線から地上に暮らす故郷へまた降りていくのだ。

朽ちかけた流木になって私は横たわったままでいる　風は動いていない　翡翠の所作を妨げないように　肌で呼吸している

ぴたぴたとものをたたく微音である　目線だけを移して眺めている　鳥が枯れ枝に敲き付けながら魚を弱らせている　やがてそれは頭から飲みこまれていった

ゆるやかな川中の石にかわせみが飛びうつる　空色の背腰が川面に融和して消えて　赤い足だけが映えている

静寂な光景を罅割（ひびわれ）させたくなくて　私は流木に戻る　そのまま耐える　耐えつづけるなかいつかゆうぐれになっている　鳥影はすでになく風景も見えない

そのにび色の場景は　与えられている時間のゆうぐれのなかにいて　まわりの気圧に圧迫されながら　荒く息をしている　古老の有様に似ていると思えてくるのだ

（「ゆうぐれ」全行）

私はこの「ゆうぐれ」を読むたびに地球上の生きものたちの危機を前にして、不安と焦燥の中で何ができるかという無力感で絶望的になるけれども、決して希望を棄ててはいけないという深い励ましのシンフォニーを聴く思いがする。山本さんが後世のものに託そうとする最も良質な詩的精神を感ずることができる。「時間のゆうぐれ」を見詰めることによって、本当に大切な時間に気づくことを目差しているように思う。「荒く息をしている古老」の心に繰り広げられたのは、地

球を飛び続ける壮大な鳥族たちの物語で、その終着点がこの水辺であったのだ。

5　「静虚の精神」と「水の充実」

第二章の題は「白いもの」だが、このあらゆるものの色彩の原点である「白いもの」へのこだわりに、山本さんは自らの宿命を感じ取っている。宿命を感じ取れる力こそが、この第二章の中心テーマであるだろう。運命は誰も知ることはできないが、宿命は経験を真摯に受けとめ、内面を心静かに探っていけば辿り着けることを暗示している。

明日は父母のところに戻れるという疎開先での夜　少年は
高熱を出した　胸がむかつき腹に蚯蚓が這う悪寒がして
一気に吐いた　白いうどんのようなものが三つ四つ洗面器
のなかにあった　それはやがて動きだした　祖母が憎々し
げに回虫を吐いてと腰を砕いた　すでに六十年余前の出来
ごとである

明日は倒産だという夜　私は高血圧と高熱で半ば倒れるよ
うにして横になっていた　胃がしぼられる痛みと喉の異常
な渇きと痙攣がひとつになって猛然と吐いた　便器の水の
なかに　白いものが沈んでいた　疎開先での瀉出物に似て
いた　しかしそれは静止したままであった　連日のうどん
の残骸であった

（「白いもの」より）

一人の生きている者にとっては、誰しも社会関係における極限の経験があるはずだ。その極限の経験の意味を山本さんは振り返り直視し続ける。己の吐くという行為に秘められた語り得ぬものを語ろうとするのだ。吐いても吐いても吐き切れなかった「白いもの」を目撃した瞬間を詩にしていく強靭な精神力がある。山本さんにとって詩とはその極限のリアリズムの経験から絞り出された「白いもの」を不吉なものとして隠し忘却することではなく、己の原点に見据えていくことなのだろう。その「回虫」と「うどん」という「白いもの」を浄化し、いつくしみ、聖なるものに転化しようとする劇的行為がある。そこには山本さんを見守ってくれた祖母や家族のあたたかい視線が感じられ、その眼差しがこの詩に深い愛のようなものを抱かせるのだ。私には「白いもの」がいつのまにか、山本さんという存在を破滅から救い出してくれた身代わりの存在のように思われてきた。と同時に、私にとっての「白いもの」とは何かを自問されてしまった。身を削りながら他者に伝えようとする真実の言葉が差し出されているのだ。

吐いたあとは清康な日日がすぎていった　生きていくため
の　少しばかりのお金と時間と自由があればよい　という
人生観に白いものたちが変えてくれた　さて次に吐くとき
はいつかと自問する　下り坂なのにペダルを踏まなければ
動かない自転車のような自分と気づいたとき　私はまちが
いなく吐くであろう　終の白いものである　私に残された
白いもの　それは静虚な精神しかないと思わせて　なぞ
の朝がある

（「白いもの」最終連）

「白いもの」の最終連はこのように自らの存在の危機を知らせてくれ、人生観を変えてくれた「白いものたち」へ感謝の言葉が記されている。山本さんは自らの極限の経験を深く問い続けた果てに真っさらな白紙の精神に辿りついたのだ。山本さんが「静虚の精神」と名付けた「白いもの」は私にはフッサールが言った純粋意識とか超越論的意識に近いと思われる。フッサールのいう純粋意識とは素朴な自然的態度を括弧に入れた現象学的還元の後に、「あらゆる世界的超越物を己の内に内蔵し、それを己の内で『構成する』絶対的存在の全体」である（『イデーンⅠ』より）と言われる。山本さんは世界を意味で構成するものとして「白いもの」を絶対的存在として見出している。「静虚の精神」とは私たちが危機に遭遇した時に、心身の白紙の場所を照らし出す、純粋に生きることの発端を促す何かなのだ。

第三章「箸」には山本さんの人生哲学が詩篇の中から摘み上げることができる。その豊かさは生きていることの苦渋を通しての、大いなる喜びであり、生きているものたちへの賛歌なのだろう。そこには父母や祖父母やその場所から伝承された深い知恵が今も息づいている。詩にはそのような生きのびるための真実を込めるべきだという確信が山本さんには感じられる。そのことは詩を読んでくれる者たちへの、詩を求める者たちへの伝達と対話を誰よりも追求しているからだろう。

何十年と使っている箸をもつ
いままで　茶碗はいくつぐらい割っているか　精神の挫折
を　いくどしてきたか　負の痙攣がどのくらいつづいたの
か　箸は私の食みぐあいで感得している
中風の祖父のようになってはいけない　桑の枝の箸で食事
をしていれば大丈夫　と母が疎開先でつくってくれた箸だ
　時間とともに少しづつ先が減っていって縮身している様
は人間そのものだ　箸に自分を仮託させて　いま夕食をと
る

（「箸」全行）

この詩題は「箸」だがその中心テーマは母である。母が子の幸せを思う気持ちを生涯受けとめるような「愛される記憶」を語った詩だ。この「箸」には人が人に手渡すべき他者を思いやる真の情報が宿っているのだ。私たちは多分このような生きた情報を耳にしているのだが、それを我がこととして受けとめていないのだ。山本さんはそんな「人間そのもの」の知恵を差し出す。そして読む者の人生という固有な時間にゆったりと問い掛けてくる。そこには何のてらいもない、「愛される記憶」を思い起こし、母に感謝を捧げて始まり、静かな祈りの夕食の時間があるばかりなのだ。

第四章「水の充実」は山本さんが私たちに伝える「生きのびるための戦略」であり、「地上の深層」である知恵だろう。最初の詩「灸」は短詩だが、壮大な地球規模の発想を秘めており、この章を象徴している詩だ。

稲刈りのあとの蘖（ひこばえ）の田に　籾殻の三角形が数えて十　二十
あまり　そこから煙がたなびいて静寂　まるで地球が灸を
しているようだ
（「灸」全行）

森や熱帯雨林を破壊し想像もできないウイルスが次々に生あるものを襲い始めている。鳥インフルエンザは人間にうつり、これから人間から人間へと伝染し始めようとしている。地球の破壊は想像を超えて深いところで進行しているのだろう。山本さんは稲刈りあとの光景に祈りのような思いを重ねて、地球の癒しを投影している。地球を癒すにはどうしたらいいのか。水の惑星である地球にみずみずしさを取り戻すにはどうしたらいいのか。そんな自問を我々に投げかけてくる。「まるで地球が灸をしているようだ」という一行が私の胸には痛みとして突き刺さってきた。この「灸」に続く「捻鍼、萎える、回鍼、打鍼、あなた擬、金漆考、絡織、付録、ふれる、絡織、さつる つねる」の十篇は、鍼師が自分の身体に鍼を打ち血のめぐりを良くしていく様や、愛する者との触れ合う「相聞」のエロス的な関係をも含みつつ、「灸」と同じような心身が生まれ変わっていく実感を記している。突き詰めていくと地球の再生は、人間の心身の問題であり、また人と人との関係の問題であるのだ。地球へ、我が肉体へ、私と他者の関係へと豊かに水を巡らすこと、滴り落ちるように「水の充実」をはかることを願い、存在者はあたかも水のように生きるべきだということを淡々と記している詩篇なのだ。

最後の詩「水の充実」の最終行で山本さんは次のように語っている。「水の充実とは流れいくことでよりも　いかに留まれるかという熱い体感のなかにあると自得して　いま生きている」。この地上に「いかに留まれるかという熱い体感のなかにある」という、自らの「身体」を通した生き生きした瞬間を取り戻し、その中で鳥族を含めた他者といかに地球という「大地」で共存するかが、この詩集の壮大なテーマだった。「水の充実」とは命が満ちる生あるものの「身体」の充実でありながら、それらが共存する場所であり、そんな世界という「大地」を取り返そうとする生き生きした精神の在りかを探す試みであるのだろう。山本さんは、衰えることのない知恵者として、古老の眼差しを持った前人未踏の詩人へと向かって、歩んでいると私には思われる。

哲学の起源は日食を予言したギリシャの自然哲学者タレスから始まったと言われる。タレスは自然（ピュシス）の根源である原理（アルケー）を水と言い、「すべては水からなり水に帰る」と合理的に説明しようとした。タレス後も自然哲学者たちのアナクシマンドロスはアルケーを「限界のないもの」と言い、アナクシメネスは「空気」と言い、ヘラクレイトスは「火」と言い、エンペドクレスは「土、水、空気、火」の四元素と言い、デモクリトスはアトムと言うなどして、自然の根源やその動力を探究していった。そしてアナクサゴラスは自然の原物質を認識するだけにとどまらず、原物質（アルケー）を非物質な動力である理性（ヌース）として見出した。ソクラテスやプラトンは理性をイデアとして自然より優位に置き、アリストテレスは自然（ピュシス）を超えたものとして形而上学（メタピュシカ）として哲学化していく。しかしギリシャ哲学では、自然の力を引き出しながら、新たな自然を製作していくという充実した関係が自然とイデアには存在していたと考えられる。このようなギリシャの哲学的精神が後のヨーロッパ文明の知の源泉になったことはいうまでもない。そこには人間が自然を生かして共存していくという問いが存在していたと思われる。

そんなギリシャの自然哲学者たちの二千五百年前に考えていた自然（ピュシス）が山本さんの無意識の中にも湧きあがり、追体験されただけでない。ギリシャからヨーロッパへ伝わり世界中に広まった自然と理性との創造的な関係が、なぜ自然と敵対する「理性」という近代合理主義が生まれ、ついには自然や大地を食い潰していく「狂気」にまで変貌してしまったのか。山本さんはそんな千からびていく地上の悲劇を見詰め、水を端緒とする生あるものの物語をもう一度、故郷の場所であり、自然（ピュシス）という「大地」から、神話を生み出した人間の暮らしの中から、再構築したいと願っているのではないか。その意味で詩集『水の充実』は、文明批評的な純粋精神を「身体」の奥底から発していく、今後の詩作の新たな端緒となる詩集であるに違いない。自然と理性の豊かな関係を再構築するキーワードとして「水の充実」を提示しているように私には考えられた。

ここまで書いてきて私には、この詩集を読ませたかった詩人が思い起こされてくる。山本さんが一九九〇年に私に紹介してくれた那須の詩人高野未明さんだ。高野さんは二〇〇四年に九十歳で亡くなるまで十数年も私の個人誌「ＣＯＡＬ　Ｓ

ＡＣＫ」に寄稿し続けてくれた。高野さんは十年間の従軍した戦争責任を、生涯自らの内面に問い続けた誠実な詩人だった。いつしか高野さんは私にとって慈父のような詩人になっていった。高野さんのように詩を愛し、無欲で詩を書き続け、私の詩誌活動を支援してくれた詩人を私は決して忘れることはできない。高野末明さんが生きていたら誰よりもこの詩集『水の充実』の刊行を喜んでくれただろう。高野さんが亡くなった後、山本さんとご自宅にお伺いして、奥様から高野さんの暮らしぶりをお聞きした日を思い起こす。ご自宅の庭に咲いていた一輪の赤い薔薇が想起され、山本さんの問うてきた「花の沈黙」と重なっていくのだ。山本さんが求める詩人と私の求めている詩人は深層でつながっていたことを知り、その出会いを促した山本さんに深く感謝している。

最後に私の好きな第二章「白いもの」から「鬆（す）」を引用してこの論を終えたい。花を愛する山本さんは「花の思考」を率直に語っているが、この世で打ちのめされた者たちが、再び立ち上がっていくための「希望の思索」であると私は強く感じている。それを促すことのできる経験と思索の深まり合った奇跡のような詩行であると私は考えている。「花の沈黙」とは枯渇した精神に命という水が巡ってくる時間の到来であり、人が生き還っていく充実した瞬間であり、まさしく「水の充実」へと私たちを導いてくれる生きた知恵を指し示している。

以来　私の花への対座は何十年とつづいている　すかすかとした鬆に気付いたとき私はそれを花に開示する　沈思が三日四日と続き　ときには花が散る寸前まで互いに熟覧しあう

対花に依る修復と啓示は　実は対自が求めた願望であったのかもしれない　しかしまだ不明なものが残る　私はさらに花を透視する　花に思考する　花は私を凝視する　花の沈黙がさらに深くなる　それから数日後　私の精神（こころ）の鬆は消えている